

&lt;報告・記録&gt;

# 「日本事情」における反転授業の可能性と今後の課題

—— 中上級日本語学習者を対象に ——

原 華 耶

東亜大学 人間科学部  
harakaya@toua-u.ac.jp

## 《要 旨》

近年、学生の主体的な学びを促すアクティブラーニングの手法の一つとして反転授業が注目されており、重要な役割を果たしている。本研究では、2020年後期に実施した中上級日本語学習者を対象とした「日本事情」における反転授業の試みについて報告する。

本研究では、「日本事情」における反転授業が導入される背景を記すとともに、その導入および実施概要、反転授業の導入に対する学習者の反応などについて報告する。最後に反転授業の可能性と今後の課題についてまとめる。

キーワード：「日本事情」、反転授業、自律的学習、中上級日本語学習者

## 1. はじめに

2020年度から新型コロナウイルスの感染拡大により、従来通りの対面による授業の実施が難しい状況が続いている。このような事態を受けて、各大学では、学生の学びの機会を担保するために、オンライン授業を余儀なくされた。

これにより、学生たちはこれまで以上により主体的に授業外学習、いわゆる自律的学習を行う必要に迫られることになった（石川・高木・市川・森本，2021）。その一方で、授業のオンライン化が急速に進む中、教員は教育の質を保証しつつ、これまでの対面授業をどのようにオンライン授業で実現させるのか、またオンライン授業ならではできることは何かについて考えなければならなくなる（奥田，2021）。そうした中で、講義のオンライン化がもたらした恩恵の一つと考えられるのが、反転授業の実践である。

反転授業は2000年頃から提唱されるようになった構想であり、現在小・中学校を中心に注

目を集めているが、一部の大学でも数学や英語、情報などの授業を中心に導入されている。近年、日本語教育においても、反転授業に対する期待が高まりつつある。

## 2. 反転授業とアクティブラーニング

### 2.1 アクティブラーニング

ところで、反転授業は、アクティブラーニングの一種とみなされている。そこで、ここではまずアクティブラーニングについて紹介しておきたい。アクティブラーニングという言葉は、平成24年8月28日の中央教育審査会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて一生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」において登場した用語である。それが、意図するのは教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学習者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図ろうとすることである。

アクティブラーニングの重要性が増している

背景には大きく二つある。まず1つには、大学進学率が50%を超える大学のユニバーサルアクセスの時代が到来し、講義型のパッシブラーニングの提供だけでは、大きな教育効果が期待できなくなっていることである。もう1つは、現代社会で求められる能力が、暗記型の能力ではなく、専門知識を前提とした実践力・活用能力だからである。これらの問題を解決する手段として要請されることになったのがアクティブラーニングという教育方法なのである（溝上, 2013）。

## 2.2 反転授業

このアクティブラーニング型授業の質を高める方途として、近年急速に注目されているのが反転授業（the flipped classroom/the inverted classroom）という教育方法である。反転授業はアクティブラーニング型の授業形態の一つであり、「従来は教室で行われたことを自宅でを行い、従来は宿題として自宅でやっていたことを教室で行う」（山内・大浦, 2014）ものである。

以下にこの反転授業の特徴を従来型の対面授業と対比させながらまとめてみたい。まず従来型対面授業では、授業で知識を得てから自宅での宿題や復習を通して知識の定着を図ることが多い。一方、反転授業ではあらかじめ自宅で知識を得たのち、教室でその知識を活用しながら知識を定着させる。つまり、前者では教室で知識を得るところから学習が始まるのに対し、後者では自宅の予習で知識を得るところから学習が始まるということにその違いがある。

反転授業は従来型対面授業と異なり、知識の

インプットではなく、アウトプットに焦点を当てる授業である。従来型対面授業の一般的な学習スタイルは、授業を受け、知識をインプットし、授業後に宿題を通して知識のアウトプットをするというのがスタンダードであった。それに対し、反転授業とは、授業前にビデオ講義の視聴で知識のインプットを済ませ、授業の演習を通して知識をアウトプットするというスタイルをとる（表1, 山内・大浦, 2014）。

山内・大浦（2014）では、反転授業は一般に「説明型の講義など基本的な学習を宿題として授業前に行い、個別指導やプロジェクト学習など知識の定着や応用力の育成に必要な学習を授業中に行う教育方法」と定義される。教師は講義部分をオンライン教材として作成し、授業外学習として予習させ、授業内では、予習した知識とその理解度の確認を行う一方で、その活用を、協同学習などのアクティブラーニングによって、学生に実践させるのである（溝上, 2017）。つまり、従来教室の中で行われてきた授業学習と、演習や課題など宿題として課される授業外学習とを入れ替えた学習形態だといえる。通常の対面授業と授業外の活動の役割を変え、対面授業の活動時間をより有効に使用できるところにその意義がある。

これらの点に鑑みて、反転授業の形式を導入した実践では以下のような一連の効果が期待されるように思われる。まず、学習意欲の向上である。演習、プレゼンテーション、ディスカッションなどを通して、教師あるいは他の学習者と教え合い、意見を交わしながら、積極性、自主性を持って授業に参加、取り組むことで、学

表1 従来型対面授業と反転授業

	従来型対面授業	反転授業
学習のスタート時点	教室で知識を得るところから学習が始まる	自宅の予習で知識を得るところから学習が始まる
知識の定着	授業で知識を得てから宿題をしたり復習したりして知識の定着	自宅で知識を得てからその知識を使いながら知識の定着
焦点	知識のインプットに焦点を当てる	知識のアウトプットに焦点を当てる
授業の設計	授業を受けて知識をインプットし、授業後に宿題を通して知識のアウトプットをする	授業前にビデオ講義の視聴で知識のインプットを済ませ、授業の演習を通して知識をアウトプットする

習意欲を向上させることができる。また、教師が学習者の理解の度合いを把握することができる。そして、授業では事前に学習した知識について演習、ディスカッションなどを通して1人1人の理解度を確認でき、適切な学習サポートが可能となり、学習者の理解度を深める結果に繋がる。さらに、学習者自身は十分に理解できるまで何度でも繰り返し講義を受けることができる。これによって、「授業で分からないことがあったのだが、そのまま授業が進んでしまったために、その後の内容が全て分からなかった」といった問題も自然に解決されることになるであろう。加えて、反転授業の最大のメリットは、予習で得た知識を用いて、能動的に学習に取り組めることにある。授業の場で初めて新しい情報に触れる従来の学習法では、「先生に何を教えてもらえるのだろう」という受動的な態度を惹起しやすいのが通例である。しかし、反転授業では、自分で既に予習してきた事柄を、授業でどう応用するかが問われる。また、分からない点があれば質問ができるのもメリットの一つである。自発的に質問ができることは、理解を深める上で大きな意味がある。もちろんIT環境の整備、予習をする時間がない、予習を徹底させられないなどのデメリットもあるが、本研究ではこれらのメリットを最大限に活かした授業設計について考えていきたい。

### 3. 「日本事情」における反転授業の試み

#### 3.1 日本語教育における反転授業の展開

近年、様々な教育分野において反転授業に関する実践報告が増えてきている。反転授業の先行研究を概観すると、一般教養科目を中心になされておられ、それに対し、外国語教育における導入例についての先行研究は少ない。また、その外国語教育についても、反転授業の実践研究が行われているのはおおむね英語教育の領域に限られている。もっとも近年では、日本語教育においても反転授業に対する期待が高まりつつあり、以下にみるように実践例も少しずつながら報告されるようになってきている。

とりわけ注目すべきは、留学生向けの授業に

おいて反転授業が試みられてきていることである(金, 2019)。たとえば、早稲田大学日本語教育センターは初級日本語学習者を対象としたオンライン総合日本語における実践例を紹介している。また、古川・手塚(2016)は、関西大学の上級日本語学習者を対象にした文法教育の場面で反転授業を行い、到達度テスト及びアンケート・インタビュー結果において反転授業の効果が見られたことを報告している。さらに中溝(2017)は、反転授業において、授業前に、Moodleを用いた文法項目のビデオを配信し、実際の授業では、小グループに分けた上で練習問題をさせ、その後、理解度確認問題と授業へのコメントの記入を学習者に科すという反転授業を行い、その結果と課題について考察している。そして、藤本(2017)によれば、反転授業に対する学習者の評価は高いという。

しかし、日本語教育における反転授業の実践は、主に文法教育・文法項目に関する報告であり、「日本事情」に関する実践報告はほとんど行われていないのが現状である。そこで、本研究ではこうした欠如を備うべく「日本事情」における反転授業の実践を試みることにした。

#### 3.2 「日本事情」における反転授業が導入される背景

##### 3.2.1 「日本事情」とは

日本語教育で扱われる授業科目には、主として言語としての日本語を教える科目と、日本文化や社会について教える「日本事情」科目がある。「日本事情」が科目として、大学教育に取り入れられるようになったのは、1962年の文部省(現文部科学省)の通知文書からである。これは、留学生が大学において一般教養科目を履修する時に特例を設けることを認めたものである。

しかしながら、ことばの教育と統合した形で行われる「日本事情」科目の場合でも、単にことばの教育に「日本に関する知識」を織り込む従来の言語学習、文化学習だけでは十分ではないという認識が広がり、それだけでは補いきれない異文化適応や異文化理解のプロセスを学習

の過程に取り込むことの重要性が指摘されるようになった(倉地, 1988)。これに伴い, ことばの教育と統合した形の異文化接触体験を取り入れた試み(倉地, 1988)や, ことばによる文化の体験を目標とした試み(細川, 1998)が報告されるようになった。

最近では, 「日本事情」科目に対し異文化コミュニケーション活動能力を育成する視点の必要性を唱える議論や, 異文化コミュニケーションの授業を行う意義と問題点に関する指摘(河野, 2000)もあり, 「日本事情」とは何か, 何を扱うべきか, 目標をどこに置くべきかについて, 目下, 様々な視点からの議論がなされている。このような「日本事情」の授業を日本語教師が担当するにあたって, いったいどのように知識を教えるべきか, そのための適切な授業形態の工夫が必要になると考えられる。

こうした背景を踏まえて, 本研究における反転授業の実践では, インプットとアウトプットを繰り返す中でコミュニケーション能力を身につけさせていくことを試みた。その際, 「日本事情」の授業では日本文化・日本社会などについて自分の意見を述べたり, グループでディスカッションしたり, 発表することが多く, 初級日本語学習者には難があることから, 調査対象としては中上級日本語学習者がふさわしいと考えるに至った。

### 3.2.2 「日本事情」と反転授業

「日本事情」で日本語学習者に対し何を教えるかは, 彼らの関心の度合と必要性はもちろんのこと, 日本語の能力によっても異なる。しかしながら, 通例「日本人の一般教養科目と同程度」の内容を, 政治・経済・歴史・文化(この中には風俗・習慣・思考様式なども含まれる)・自然・科学などの領域に亘って教授することが共通認識としてあるように思われる。

ところで, 日本語学習者に「日本事情」への関心を持たせるためには, どのような工夫と配慮が必要になるのだろうか。たとえば, 取り上げるテーマについて, 伝統文化といったトピックスに加え, 最近の日本語学習者の興味を引くような話題を盛り込み, 楽しく学べるよう配慮

する必要があるように思われる。日本の社会や文化などについて学ぶ際, 自国のものと比較し, それぞれの事柄を多面的・多角的に考える社会文化的な能力を身につけていくことも求められるであろう。

反転授業は, 学習者の授業に対する学習意欲を高める効果が期待される。それだけに, 学習者の強い知的欲求に応える授業形態の開発には, 授業内容の定着に及ぼす知的好奇心の影響に注目し, 学習者が授業内容に主体的に取り組むことのできるような活動を組み込んだ授業を実施し, その実践の内容と結果について分析・考察を行うことが不可欠であると考えられる。

## 4. 「日本事情」における反転授業の実施

筆者は2020年後期に「日本事情」において反転授業を一部授業に導入した。それを受けて, 本論では中上級日本語学習者を対象とした「日本事情」授業での実践を取り上げ, その内容の報告と結果の分析・考察を行う。

### 4.1 実践概要

本研究では, 西日本のとある私立大学に在籍する中上級日本語学習者18名を調査対象とした。反転授業の実施期間は2020年9月から2021年3月である。以下の表2は反転授業の実践期間, 分析対象, 日本語能力をまとめたものである。本授業の受講者の多くはベトナムからの留学生であるが, 中国の留学生も混じっていた。異なる背景を持つ学習者が, 事前のビデオ, 課題による個別学習や, グループによるディスカッション, 協働学習をどのように認識したか, それぞれのレベルの学習者にどのように受け入れられたか, について調査した。

表2 実践概要

実践期間	2020年9月～2021年3月
授業科目	日本事情
分析対象受講者数	18名
国籍別人数	ベトナム(17名) 中国(1名)
日本語参考レベル	JLPT N3以上合格歴有(16名)

## 4.2 授業計画

反転授業は、1回90分で、全16回を実施された(表3)。その際、受講者を対象に、第1回と最終回の授業の2回にわたってアンケート調査を実施した。最初のアンケート調査はオリエンテーション後に行い、日本事情の授業で取り上げたいテーマについて調査した。学生の回答からは、「日常的なもの」、「比較文化的なもの」「日本社会・日本文化に関するもの」といったテーマが圧倒的に多かった。

アンケート結果を基に、以下のように授業計画を行った。奇数回(第1回は除く)はグループ活動、偶数回ではZoomを用いる同期型オンライン授業を行った。前者は前週のトピックスの内容についての意見交換・ディスカッション・発表などのグループワークである。偶数回の授業は、講義ビデオ、講義プリントによる予習、Zoomによる講義、振り返りなどが中心的な内容であった。

授業で取り上げたテーマについては、伝統文化といったものに加え、最近の学習者の興味を引くような話題も盛り込み、楽しく学べるよう配慮した。さらに取り上げたテーマについては、自国との比較を含め多角的に捉えるように

促し、社会文化的な能力も身につけさせるよう努めた。

本授業で使用するプリントはすべて自主教材である。最初の授業で、反転授業の進め方、講義動画と授業の関係について説明し、動画を見る際にはメモを取りながら視聴するなどの指導を行った。

## 4.3 授業の進め方

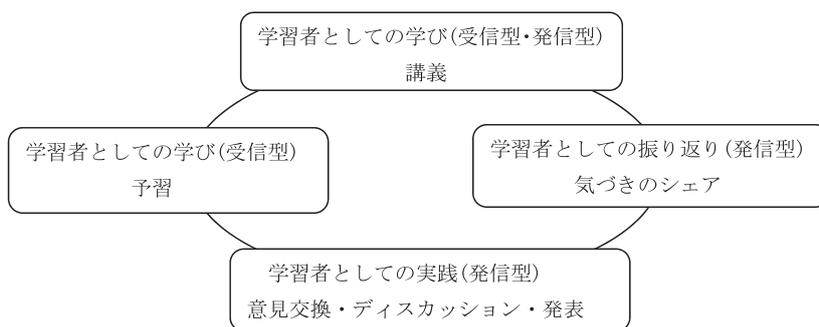
授業の事前準備として、教員はその都度のトピックスに関する講義ビデオを作成する。学生は講義動画が10分を超えるとスキップする回数が増える傾向にあるため(奥田, 2021), 作成にあたっては1つの講義動画が10分程度になるよう留意した。

授業を実施するにあたって、毎回事前に準備したPowerPointを用いたビデオのデータや、講義内容のプリントを受講者に配信し、予習させた。学生は、1回の授業につき10分程度の動画を、配信されたプリントを見ながら視聴することになる。動画の作成にあたっては、PowerPointで作成したスライドを動画に変換したうえで、YouTubeにアップロードし、限定公開した。動画の内容は、いずれも当日のトピックスの導入部分であった。その後、確認問題を配信し、予習の効果を検証した。次にZoomを使った同期型オンラインセッションによる講義を行った。そこでは、教員によるポイントの説明と確認テストの解説、教員と学習者、学習者同士による意見交換などがなされた。そして、授業の終わりの部分ではその授業を振り返り、コメントと感想を記入したうえで提出させ、次回のディスカッションの内容として発表させる形で進めた。その次の授業では、学習者を毎回異なる4人程度の小グループに分かれさせ、以下の活動を行った。①前回取り上げた課題について各自で考え、その後、グループで討論しながらグループごとの意見をまとめさせた。②各グループから代表を1名を選出し、学習者全員の前で発表させた。③授業終了10分前に、その日に取り上げた課題について学んだこと、感じたこと、伝えたいことを記入

表3 「日本事情」の授業計画

第1回	オリエンテーション
第2回	日本の衣服と食事
第3回	前週のトピックスの内容について
第4回	日本の住宅と交通
第5回	前週のトピックスの内容について
第6回	習慣・年中行事
第7回	前週のトピックスの内容について
第8回	伝統的日本文化
第9回	前週のトピックスの内容について
第10回	現代文化とポップカルチャー
第11回	前週のトピックスの内容について
第12回	日本の教育
第13回	前週のトピックスの内容について
第14回	日本人の一生
第15回	前週のトピックスの内容について

図1 授業設計



して提出させた。

授業のサイクルについて図1にまとめてみた。ここで今一度その流れを整理しておきたい。まずはじめに講義ビデオと講義プリントを学習者に配信し、学習者に予習させる。この予習の段階はなお受信型であり、学習者は講義ビデオや講義プリントを見ながら自ら学んでいく。次にZoomで講義を行い、学習者はその中で分からないところを質問するなどして、受信型学習、発信型学習の双方を行う。その後、宿題としてコメントと感想を提出する発信型学習で、気づいたことをシェアし、学んだことを振り返る。次回のグループワーク活動も発信型となっており、意見交換、ディスカッション、発表などを通して理解を深め、コミュニケーション力、ディスカッション力などを高めていく。

このように上記の反転授業では、学習者が協働で問題を解決し、互いに認知プロセスを外化することを通して理解や記憶を深め、その習得につなげることを目指している。また、学んだ内容を学習者が主体的に理解し、自らの意見や見解を発信する力を培うことも念頭においている。さらに、意見交換やディスカッション、クラスでの発表を通して、そのテーマに関する社会的・文化的背景にも触れることができ、コミュニケーション能力の向上にも繋がると考えられる。

#### 4.4 筆者による授業の実践と学習者の反応

上記の授業方法による実践を踏まえ本研究では、受講者に対してアンケート調査を実施し、

反転授業に対する評価、動画および動画の視聴についての評価、授業中グループワークに対する評価の三つの観点から分析を行った。また、インタビュー調査を通して、自律的学習など受講者の主観的な意見や感想なども集めて整理し、分析した。

##### 4.4.1 アンケートの結果

###### ① 反転授業に対する評価

反転授業を受けた学生の感想：

- ・この授業は役に立っていると思う
- ・普通の授業より、この授業のやり方の方が良い
- ・事前に予習して当日の授業が分かりやすくなった
- ・授業中先生がいったことが、すぐ理解できた
- ・動画では日本の文化を理解すると同時に、文法・語彙の勉強をするようになった

筆者が実践した感想：

この結果から反転授業を導入することにより、一方通行の講義形式ではなく、学習者が主体的に関わる授業の実現が期待できることがうかがえる。しかし、「授業が分かるようになったから授業は眠くなくなった」のように反転授業と対面授業との関連性が希薄であったため、学習効果が実感しにくかったという意見が見られ、今後の課題に結びつくような示唆も得られた。

## ② 動画および動画の視聴に対する評価

反転授業を受けた学生の感想：

- ・講義動画は役に立ったと思う
- ・講義動画をこれからもっと使いたいと思う
- ・予習と授業で2回説明を聞けるので記憶しやすく役立つと思った
- ・動画とは別に日本語の勉強をするようになった
- ・動画のおかげで普段日本語に触れる時間が多少増えた

筆者が実践した感想：

この結果から動画に対する肯定的なコメントがかなり多かったが、「動画を見て分かったところをもう1回聞くとつまらない」「動画を見なくても次の日に授業を聞いたら分かるから」という否定的なコメントも見られた。

## ③ 授業中グループワークに対する評価

反転授業を受けた学生の感想：

- ・学習者同士で意見交換や教え合う機会を増えた
- ・他者との協働学習やディスカッションに積極的に参加することができた
- ・理解ができなくて、授業中にほかの友達から教えてもらって良かった
- ・日本語でたくさん交流ができて楽しかった

筆者が実践した感想：

反転授業の導入によりグループワークの時間を確保でき、授業中の発言や意見交換の活発化、グループ協働し問題を解決しようとする姿勢や意欲が感じられたが、その反面、「私は日本語が上手ではなくてほかの人に説明する時、言いにくいです」のように日本語能力的な問題が挙げられていた。また、「答えがそれぞれ違って、答え合わせができない、時間ももったいない」などの見解も見られた。このように、グループワークについては自由記述で数字には表れない課題が多く指摘された。

上記の三つの分析結果は、授業実践の分析から一部抜粋したものである。今回の調査において、学習者はおおむね質問項目を高く評価しており、「日本事情」への理解度が高まり、授業にも入りやすくなったという意見が多く見られた。このことから、「日本事情」における反転授業の導入により、学習者の学習意欲が高まる

ことが期待しうるように思われた。

## 4.4.2 インタビューの結果

上記アンケートの補足として授業後にインタビューを行った。その結果、しばしば反転授業のメリットとして挙げられているキーワード「自律性の育成」に関しては、「今までは、家で勉強するのはテスト前日だったりしたが、このスタイルになってから予習が充実してできている」「自分が知りたい気持ちが強くなる、自主性が高くなったと思う」と述べている学習者がいたことが特筆される。また、事前の反転授業を通じ学習目的を確認することで、学習者が効率的な学習のためには予習が重要であることを認識していることも分かった。

デメリットとして挙げられる「学習者の負担」については、以下の点を指摘しておきたい。事前学習用講義動画の視聴とメモ作成が主として主体的な学習活動を目的としたものであるため、動画はいずれも10分程度の長さであったが、これに対して「ちょうど良い」という回答は83%、「長い」という回答は14%を占めており、「短い」という回答は3%にとどまった。また、インタビューでは「毎日あるから、時々疲れる、もっと短くていい」というコメントもあり、負担に感じている学習者がいることも分かった。その一方で、「分からないところがあったら、何回も繰り返し視聴できる」「視聴する時、一回席を離しても心配なし」というポジティブなコメントもあったことを付け加えておきたい。さらに、講義動画のアーカイブ化によって、欠席した受講者や一度きりの講義において教員の言葉を聴き逃がした受講者の理解面における学力保証も可能となることは、教学面においても有益であるように思われる。

インタビューでは、さらに多くの学習者が「発表するので、理解度が深まる」「自分たちで意見を出し合って考えることができた」といったコメントを述べていた。このことから本形式の授業によって演習時間の充実をはかることができ、これまでの講義形式とは異なる受講者の学びへの積極的な関わりを引き出すことが出来たことが明らかになったように思われる。

総じて今回のインタビュー調査から、学習者が反転授業を受けることにより、「自律性の育成」、「自主性の向上」、「理解度が深まる」など、反転授業のキーワードとして挙げられる指標に関する反応が確認された。これらのことから、反転授業は、長期的に見れば、学習者にとって自律性が高められる効果的な教育方法であることが裏付けられたように思う。

## 5. 考察

ICT を活用した反転授業の導入によって、学習者からは「自主性が高くなる、授業内での活動の時間が増えた」など、多くの肯定的評価が得られた。当初、学習者は反転授業に対して教育方法の変化による戸惑いや、一部に拒否感にも似た反応を示す者があったものの、この形式による授業を経験するにつれ、徐々に能動的学習を中心とする反転授業の効果を認識し、予習の重要性に気づくようになってきた。こうして彼ら自身の中で、主体的・能動的な学習こそが自身の能力を向上させることになるという学習観の変化が起こっていることが明らかになった。

本研究は、「日本事情」において反転授業の導入を試みたものであった。その中で反転授業のメリットを十分に活かすためには、授業者が授業全体を設計する能力を身に付けることが必要であることが痛感された。反転授業を行う際には、講義における知識伝達部分に相当する動画教材を授業者が作成し、それをもとに学習者が自宅で事前学習を行うことが基本になる。それゆえ、反転授業を導入するにあたって、授業者は受講者の学習意欲を高めるとともに、それが授業外での主体的な学習におのずと結びつくという前提に立ち、有効な学び場となるよう配

慮することが重要となる。

ここでのグループワークは、説明型の動画講義を宿題として授業前に行い、ディスカッション、課題解決などのプロジェクト学習活動を基本とした学習者同士の学習を中心として高度な能力を伸ばしていくことを目指している。これによって従来の一方伝達的な授業では育成されなかったコミュニケーション力、ディスカッション力、協調力、課題発見・解決能力などの様々な実践的能力の向上が期待できるように思われる。

これまで見てきたように、学習内容が身につくためには、学習者自らの能動的な学習、いわゆるアクティブラーニングが不可欠である。従来型の対面授業では授業者による一方的な教授に終始しがちだったが、反転授業では、学習者を主体と位置づけることで、考える力、コミュニケーション力、ディスカッション力、協調力、課題発見能力・解決能力などの諸能力を伸ばす可能性がより一層増してくるようになる。これは、反転授業の最大の魅力であると考えられる。

## 6. おわりに

本研究では、限られた被験者数に対し実験的環境下で実施したこともあり、時間的要因が学習効果へ及ぼす影響を十分に検討できずに終わったという難点があり、結果の再現性や一般化には限界がある。また、特定の科目を題材に実践を行ったため、科目や扱う題材次第によっては、効果の度合いが変わる可能性も考えられる。今後は、これらの点を考慮しつつ、現在の実践を発展させ、授業の改善に努め、より学習者の主体性を活かした反転授業のモデルを構築していきたいと思う。

---

## 参考文献：

石川晴香・高木正則・市川尚・森本康彦（2021）「授業外学習における学習計画と学習状況の客観的な把握を促す振り返り支援機能の開発と評価」情報教育シンポジウム論文集

（2021），pp.45-52  
奥田阿子（2021）「コロナ禍におけるオンライン授業による反転授業のあり方」『長崎大学言語教育センター論集』第9号，2021

- 年3月, pp.16-27
- 河野理恵 (2000) 「戦略的日本文化非存在説—日本事情教育における文化のとらえ方をめぐって」(21世紀の日本事情) 第2号, pp.4-15
- 金玉花 (2019) 「中国の大学の日本語教育現場における反転授業の実態とその課題—教師と学生のビリーフのPAC分析から—」日本語教育研究, 65巻, pp.69-93
- 倉地暁美 (1988) 「中級学習者の日本語日本事情教育におけるグループ研究プロジェクトの試み—異文化間教育心理学の視座から」(日本語教育) 第66号, pp.48-62
- 溝上慎一 (2013) 『「深い学び」につながるアクティブラーニング』東信堂, p.6
- 溝上慎一 (2017) 「アクティブラーニング型授業としての反転授業」森朋子・溝上慎一編『アクティブラーニング型授業としての反転授業』ナカニシヤ出版, pp.1-15
- 中溝朋子 (2017) 「留学生対象日本語クラスにおける反転授業の実践—中上級文法クラスにおける試み—」『大学教育』第14巻, pp.55-62
- 藤本かおる (2017) 「学習者から見た反転授業実践：アカデミックライティングでの実践から」武蔵野大学学術機関, 第1巻, pp.77-84
- 古川智樹・手塚まゆ子 (2016) 「日本語教育における反転授業実践—上級学習者対象の文法教育において—」日本語教育 164号, pp.126-140
- 細川英雄 (1998) 「ことばの文化はどのようにして体得されるか—プロジェクト活動の達成と課題」『早稲田大学日本語研究センター紀要』第11号, pp.163-176
- 山内祐平・大浦弘樹 (2014) 「序文」ジョナサン・バーグマン&アロン・サムズ (著), 山内祐平・大浦弘樹 [監修] 上原裕美子 [訳] 『反転授業』オディッセイコミュニケーションズ, pp.3-12
- 松下佳代 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング』勁草書房, p.24

<Report/Record>

## Possibility and Future tasks of Flipped Classroom in Japanese Culture and Society

— For intermediate and advanced Japanese learners —

Kaya Hara

University Of East Asia    Faculty of Human Sciences  
harakaya@toua-u.ac.jp

### 《Summary》

In recent years, flipped classrooms have been attracting attention as one of the methods of active learning that encourages independent learning by students, and they play an important role. In this study, we report on a trial of a flipped classroom in Japanese culture and society for intermediate and advanced Japanese language learners conducted in the second half of 2020.

In this study, I will describe the background of the introduction of the flipped classroom in Japanese culture and society, and report on its introduction and its implementation, as well as learner's reactions to the introduction of the flipped classroom. Finally, we summarize the possibilities of flipped classrooms and future challenges.

Keyword:

Japanese culture and society, flipped classroom, autonomous learning,  
Intermediate and advanced Japanese learners